

故で下半身不随になった青年は、車いすフェンシングの希望を見だし、被災地や医療現場で担う「臨床宗教師」になった。学生、僧侶、パラリンピックを目指す障害者アスリート。

そんな肩書や経歴は、人々の苦悩や悲嘆に通用しなかった。「どう寄り添えばいいのか」。かつて人生に絶望した一人の人間として、これからも自問自答を続ける。

(小野木康雄)

# 悲しみに寄り添いたい

## 龍谷大院で学ぶ藤田さん



臨床宗教師の研修で傾聴の実習をする藤田宣さん—平成26年6月(龍谷大学院提供)

### 臨床宗教師、車いすアスリートとして

19歳で下半身不随  
浄土真宗本願寺派の僧侶  
で、龍谷大学院2年の藤田宣さん(19)は、大阪府河内郡藤田町に生まれ、今年1月、同大学院が養成する臨床宗教師の1期生として講座を修了した。16、17の両日は国連防災世界会議が開かれていた仙台でフォーアアップ研修を受けた。



19歳だった平成18年夏、友人たちと三重県へ海水浴に行き、突堤から飛び込んだ際に頭を強打した。一命を取り留めたものの、首の骨が折れ、頸椎を損傷。まひした下半身は、二度と回復しないと言われた。



臨床宗教師と車いすフェンシングを両立させたいと話す京都府下京区の龍谷大学大宮学舎(志保駒貴撮影)

臨床宗教師 宗教や宗派の違いを超え、被災地や医療現場などで人々の悲嘆や苦悩に寄り添う宗教者。布教や宗教勧誘は行わない。東日本大震災を機に東北大学院が平成24年度から養成を始めており、龍谷大学院や鶴見大などがこれに続いた。今年2月末現在の修了者数は東北大学院で91人、龍谷大学院で11人。

「車いすフェンシング」という競技がある。やってみないか。リハビリの目標ができた。

や水泳を2年ほど続けて回復と強化に専念。10年の広州アジアパラ競技大会を皮切りに、国際大会に出場する選手に成長した。両親や友人たちの支えがあったことに感謝した。今度は自分がたれかを支えたい。身体障害者になって苦しみを抜いた自分だからこそ、だれよりも人の気持ち理解できるはずだ。臨床宗教師になりたいという思いが、自然と芽生えた。しかし、東日本大震災の仮設住宅で被災者の話を聴く「傾聴」の実習をするうち、自分が「傲慢だった」と気づかされたという。「家族や自宅を失った方々の心の傷はとも深い『あなたより僕の方がつらい思いをしてきた』とは到底いえない。何もできずに、逃げ出したくなる無力な自分がいた」

無力でなく微力  
僧侶として、相手にどう寄り添えばいいのか。そもそも寄り添うことは、一体何なのか。昨年4月から9カ月間に及んだ研修で、絶えず模索してきた。指針としていた言葉がある。「微力であっても、無力ではない」。研修主任の鍋島直樹教授に教わった。無力だから何もしないとおさらめるのではなく、行動して微力を出せ、というメッセージだと捉えている。

が安らぎの場になれば、と、今なら思える。学生生活は残り1年。臨床宗教師としては、16、17日の研修で自らの傾聴活動を振り返り、欠点を指摘してもらおう。さまざまな現場で経験も積みつもりだ。車いすフェンシングでは16年リオ、20年東京のオリンピック出場を目指す戦いが本格化する。「どちらもあきらめず両立させたい」。だれかの生きる希望になれると信じている。